

(前ページよりつづく)れ、大抵の家にはエアコンとカラーTVがあり、また東京のそれとたいして見劣りしない大きなスーパ―があり、大抵の物は手に入ります。

そのマジュロに家を借りて半年近くなりました。これまで四回マ―シャル諸島を旅して長い時は半年近くも一つの島に滞在して、ほとんどの事情には通じているつもりでも、やはり旅をするのと住むのとは全く違います。今度は妻と一緒にすから女性の眼からこの生活習慣を見直すと随分と違って見えてくるから不思議です。この事は別の機会に譲って、私はいまマジュロから二九五マイル(四七二キロ)はなれたクウェゼリ環礁内の小島メジャト島にいます。到着後一週間くらいで仕事を終え島は離れるつもりがクウェゼリン(イバイ)に戻るポ―トがなく、もう三週間も小さな島に閉じこめられこの島の唯一の公共的建物である集会所に寝起きして、島の人が届けてくれる食物で暮らしています。

メジャト島にはこの五月、残留放射能を逃れたロンゲラップの住民三三四人(三九世帯)が住んでいます。東西約二キロ、南北五〇

〇メートルのこの小さな島は、もとのロンゲラップに比べると随分自然の様相が違い、ここで会った人は皆「メジャトは好きじゃない。パンの樹もタコの樹もないし、船をつけれないいい浜はない」と言います。しかし、また「もうこれ以上ロンゲラップには住みつづけられなかった。放射能は本当に怖い。何を食べても全部ポイズン(毒)だからね」と帰るに帰れない悩みを語る。

またロンゲラップではコブラ(ヤシ油)の収穫で収入を得ていたのが、この島のヤシは食用にも不十分で、また当初は(汚染の持ち込みを恐れて)家畜の移入が禁じられていたので食物はほとんどUSDAフード(米国農務省の援助用食料)の缶詰に頼っています。

「こどもたちの未来のために」としてあえて生活面の不便をしのいで

メジャト島に移住したロンゲラップのこども。人々は持ちこんだ古い家の材料でようやく小さな家を建てた。こどもたちの食事のほとんどはUSAフードだ。



この島に移住してきたロンゲラップの住民ですが、間もなく新移住者が入島し、十月には五〇〇人(五〇世帯)の人が暮らす予定です。若者たちも仕事がなく一日ボンヤリと過す姿が目につきます。このままでは間もなくキリ島に移転させられたビキニの人々の暮らしが再現するでしょう。そして、いつの日か島に還れる日を待っているのです。しかし、ロンゲラップには島の人々も言うように、半減期二万四千年という人間の生活史をはるかに越えた猛毒が腰をすえ

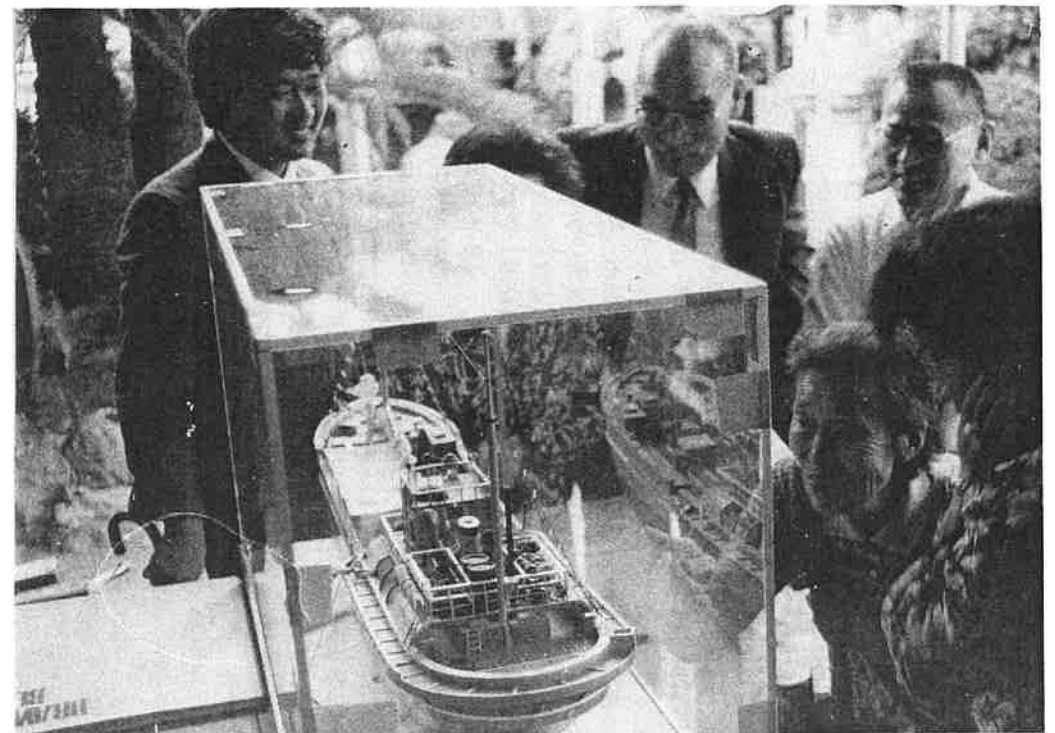
ている。

人々はまた米国議会でのコンバクト(自由連合協定)批准の成り行きを見守っている。成立すれば今後十五年間に三、七五〇万ドルの補償金が入る。故郷の島に待つ猛毒と、途方ない巨額の金の間で、いまロンゲラップの人々の心は乱れ、すさみ、かつての自給自足の静かな生活はもう二度と戻って来ないことを、いまメジャト島にいるロンゲラップの住民は暗示しているようだ。(九月十七日、メジャト島にて)

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494



9月23日、弘徳院。第五福竜丸の模型を見つめる久保山かずさんと元乗組員の家族。(詳細6面)

遺言碑へ傘交う集い虫・花継ぎ
ゆっくり癒えよ秋雨がつつむ福竜丸
ちひろ絵のとなほ風下に久保山忌
不死鳥の帆を秋空へ修理の船
証し舟萎ゆな添え木の組むスクラム
白髪絶唱碑とびしょ濡れの櫛田ふきさん
水虫かゆい反核の靴下毅然と穿く
福竜の腹撫ぜる反核署名した手
死の灰を知らぬ子九月の海を画く
菊は竜骨悼みのいろや炎ゆるいろ
沖へ飛沫の秋雨わかち久保山忌
被爆船へユーカーリ雨に白い花期
九月後半一枝一枝の献花熱し
老いの確認反核確認ききよう捧ぐ
福竜丸癒えよ船釘に鳴る草の露
菊を碑に足場のきしみなつかしき
失業を秘める踵に久保山碑
久保山忌核五万発抱く人間で
海魚のまなじり尖る久保山忌
梳き櫛の欠ける髪から核破片
不機嫌な自画像八月の聖書抱く
誓いの献花船は手術のいたみこらえ

〆第五回久保山忌句会より〆

【連載】ヒロシマ・ナガサキ被爆四十年の中で (5)
原爆文学が教えてくれるもの

長岡弘芳

一昨一九八三年『日本の原爆文学』全十五巻(ほるぷ出版)が出版された。戦後三十八年に初めて集められた。編集委員の一人は「原爆文学」というのは、かつては蔑称だったんだ」と言った。ことほどさように、原爆文学はこれまで、片隅の存在であり続けてきたのだった。

原爆投下がそうであるように、原爆文学もその生い立ちから不幸な歴史をもつ。原点的な存在である原民喜の『夏の花』も大田洋子の『屍の街』も、被爆した四五五年内に書きあげられながら、すぐには発表できなかった。占領軍による報道管制があったからだ。原爆被害の惨状がひとまず知れ渡るのは、講和条約発効後のことになる。その空白の期間、原爆文学をその底辺から支えたのは、秘かな草の根の民の声だった。原爆文学の歴史は、ときの権力の弾圧とそれへの民の抵抗を孕んで歩み始めるのである。

やがて新しい伝統ともなる、この原爆投下による民の声の連なりは、講和条約発効後にその存在を明確にする。歌集『広島』や句集『広島』『長崎』、『死の灰詩集』といった数多くの選詩集類や、『原爆に生きて』を初めとする各様な体験記類が、いっせいに生み出されてくる。

私が『原爆文学史』なるものをまとめたのは、ベトナム戦争と重なりあう戦後二十年も過ぎた頃だったが、その私を打ったのは、原爆文学がもつこの抵抗文学としての傾性と、民の声の連なりが大きく流れを支えている、いわば民衆文学としてのありようだった。まただから原爆文学は、「政治的」であるの「文学ではない」のなどといわれる長い蔑称の時期を耐えねばならなかったのである。それでも原爆文学の流れは途絶えることがなかった。片隅の存在に追いやらねながらも、時間の経過のなかでゆっくり成熟した井上

光晴の『地の群れ』、堀田善衛「審判」などの作品群を生み出し、井伏鱒二『黒い雨』や林京子『祭りの場』、小田実『Hiroshima』等々へと引きつがれて、今日の日本文学の中に一つの確かな流れを形作り、海外へも伝えられている。ときが経つにつれ『原爆』が内含する大きな意味が、次第に深く広く、人々の目をひきつけずにはおかなかったからである。

『原爆の図』を描き続け、海外に出かけることの多い丸木夫妻は、「各国の人民がそれぞれのやられた歴史を記録する。それを伝えよう。それが草の根による国際交流というものではあるまいか」という。原爆文学は日本の側からする、その一つの提示である。それはたとえば中国側の「南京大虐殺」、韓国・朝鮮側からする「強制連行」の事実の提示とリンクする。またそれは当然、「ヒロシマ・ナガサキ」が古典的情景となつた現在の国際的な核状況への、民の側からの抵抗のひろがりやを形づくる。生命への希求を主潮音とする原爆文学の歩みは、そうしたこともまた教えてくれるのである。(文芸評論家)

わたしの数百万の
こどもたちのために

小雨降る九月十四日、第五福竜丸は遠いマヤ族インディアンに熱烈な訪問を受けた。世界各地の民話・伝説を手話を交えうたう「平和の語り部」フロリーティグ・イーグル・フェザーさん。金色の五つの龍がバランスよくつりさげられた折紙のおみやげを持参、船を前に静かな声で、青い海をみてごらん、平和な世界と静かな海を……と日本語で歌いステップを踏んだ。「ふくりゅうまるがいつまでもわたしの数百万のこどもにかたりかけてくれることを祈っている」と久保山記念碑の前で語り、夾竹桃の横にインディアンに平和の花を頼った。翌日、ていねいに包装された花の種子五粒が郵便で届いた。花は「ワイルドフラワー」とかいてあった。

九月二十日は、マサチューセッツ州立バークシャー短大のドナルド・レロップ教授夫妻が訪れた。レロップ氏はカメラを、夫人は説明をメモする二人三脚の見学。展示館の見学はアメリカで被爆の実相を知らせている、レロップ夫妻の今後の活動に生かされそうだ。

マーシャルの島民を追う

写真と文 島田興生

放射能を恐れ、無人島に集団移住したロンゲラップ島民のニュースは、改めて、第五福竜丸の向こう側のマーシャル島民の問題を浮かび上がらせた。この度、移住先のメジャト島でのその後のロンゲラップ島民の様子を、カメラマンの島田興生氏より届けられた。一九七四年以降、十一年間にわたりマーシャル諸島を追い続けてきた島田氏は、五年間の計画でマジュロに常住するため、この四月マーシャルへ向かった。今回の現地ルポはその第一報。今後、島田氏の新らたな連載も予定している(編集部)。



マジュロのサンゴ礁の海には、こどもたちの声が響く(写真上)、しかし、都市化が進み、建築中のスパーの裏には、離島から集って来た人たちのスラムが出来つつある(写真下)。

マーシャル諸島(ミクロネシア)をはじめ訪れたのは一九七四年。それから十一年たって私と妻は柴犬を一匹つれて、太平洋のまっただ中のサンゴ礁の島に引っ越ししてきました。大抵の人は「どうしてまた」といぶかし気に聞きます。コバルトブルー海とヤシの生い茂る浜辺の美しい景色は、同時にまた決して暮しやさい世界でないことを知っているからでしょう。

実際、交通機関も、電気、水道、マジュロのサンゴ礁の海には、こどもたちの声が響く(写真上)、しかし、都市化が進み、建築中のスパーの裏には、離島から集って来た人たちのスラムが出来つつある(写真下)。

電話など多少とも文明に関係のあるものは、ルーズというかでたらめな運営ぶりで生活上の不便・不安の極みです。さらに食品、衣類をはじめ全ゆる商品が輸入品のため、価格は平均で東京の三倍もします。

それでも私たちの住むマジュロはマーシャル共和国の「首都」で、中部太平洋随一の大会です。人口は一万二〇〇〇人もあり、町には日本車があふ(次ページへつづく)

没後二年 被爆兵士ジョン・スミザマン氏

私は福竜丸の名譽乗組員

会員(全米原爆復員兵協会)は一万五千名強。いろいろな実験場にいた人たちだよ。クロスローズ作戦に参加したものは四万二千いて、そのうち二万七千人は死んでいる。

一九四六年七月一日に、最初の爆弾が飛行機から落とされる。私たちは短パンで立っていました。十時間以内に、私たちは爆心地点に



「若いときのジャック・デンプシーとロバート・ミッチャムをかけあわせたようなハンサムなスミザマン氏。彼の声は、おどろくほど優しい」— 来日し、治療を受けるジョン・スミザマン氏。

直接もどり、標的艦船のわきをとおりすぎる。七十五の標的艦船があったんです。私は上甲板にいて、インディペンデンスに乗り移って、消火作業をする志願者が数人ほしいるというもんだから、私たちは乗り移って、一時間作業、二時間休みの交代制でやっていたわけです。たぶん六十人か七十人いたと思います。

私は三時間消火作業をしました。ガイガー・カウンターをもった科学者がいて、通過していく私たちをチェックするんです。放射能がついていないかどうかね。私たちは連中がなにをチェックしているのかも知らなかったんですよ。まったくなんだかわからない。けっして教えなかったんですからね。

日本から授けられた栄誉がいくつもあります。大きいのは、私が日本にいて治療をうけた最初のアメリカ人復員兵だということです。日本には第五福竜丸という船があったんですが、核実験の風化に入ってしまった乗組員の何人かが死んでるんです。船の運んでいた魚も全部高レベルの被曝をしていた。私に船の日記にサインをさせ、私を福竜丸の名譽乗組員にしてくれた。広島市長は、四十七分間も時間をさいて会見してくれる。日本から帰るとき、むこうの医者たちは、アメリカに帰ってからもその治療をつづけられないのが残念だということです。六カ月間あいてしまうと、日本でうけた治療が無意味になってしまうからです。帰国してから、この治療をうけさ

せようと、いくつかの病院に私を入れようとしてくれました。しかし政府が許さないんですね。もし私がこの国で入院して放射線被曝の治療をうけることになれば、私の勝ちでしょう。賠償を認めたことになるから。

アンクル・サムは 復員兵を守る義務がある 私は自分にいったんですよ。こんなにひどい目にあわせてるんだ、これ以上のことはできません。それで、全部ぶちまけたんです。

私の肉体の一オンス一オンスをかけて、私が吸いこむ最後の一呼吸まで、連中が私やほかの兵隊たちにあそこでしたこともくつがえすまで私は闘いつづけますよ。ほかの復員兵たちには、私よりもはるかに苦しんでいるものがある。「よい戦争」(晶文社)より抜粋

※ジョン・スミザマン氏
元全米退役被爆軍人協会会長。
一九四六年七月、アメリカがビキニ環礁で行なった原爆実験に、海軍兵士として参加。一カ月後から両足がむくみ始め、七七、七八年相次ぎ、両足切断。八二年、治療のため来日、展示館に立ち寄り。八三年九月十一日死去。

来館者の声から

私の父は元乗組員でした。私が物心ついたところから話を聞かされ、原爆のおそろしさはいやというほど心の中に残っています。今日初めて資料館に来てとてもおどろきました。何故なら、あまりにもむざんになった福竜丸をみて悲しくなってきたからです。それに三十年も

たち、まだ現在も残っている姿を見て感動をしました。日本いや世界最後の被爆になってほしいものです(池田弘志)。

あの甲板上で乗組員の方が、キノコ雲を「ア」という表情で見ている姿が目につかんでくる程迫力のある展示でした。廃船の危機にあった船をこのような形で残して下さった多くの方々、そして今尚その運動を続けていらっしゃる方々に頭が下がる思いがいたします。今度はひとりではなく友人を連れてきて

● 焼津・東京：九・二三久保山愛吉氏追悼のつどい

「これでいいか」「上等だよ」「もう文句を言うなよ」……弘徳院の一角、第五福竜丸の模型を前に、元乗組員の会話は弾んでいた。模型は、大石又七さんがわざわざ東京から運んだ、進水したばかりの五号目。

九月二三日午後二時過ぎ、人影も途絶えた弘徳院に、元第五福竜丸乗組員が次々に集まってきた。「福竜会」の会長の見崎吉男さんはカメラ、三脚、大きなスケッチブックをかかえて登場。スケッチ

ブックには、毎年見崎さんが乗組員に送る9月23日の案内状と、当日の参加者の記念写真が年代順に貼られていた。案内状は年毎に、写真、絵、メッセージなど、創意工夫された、見崎さんの「福竜丸」に寄せる思いがあふれたものだった。「船が直つたら、一度みんなで見に行こうか」— あいにくの雨模様だったが、乗組員の面々には笑顔がこぼれていた。

「福竜会」に先立ち、焼津では午前中、三・一ビキニデー静岡県

感想を話しあってみようかと思えます(日本社会事業大学生)。

本物を自分の目で見ると見ないとでは、かなり違います。広島のはんと同様に、福竜丸も一度は見たいと思えます。核戦争へつながっていく、多くの核実験のまねく恐れさなどについて、日頃の平和そうにみえる生活の中で、いつも考えていかなければならないと思うのです(神奈川 金子)。

実行委員会主催の墓参行進、墓参の集いが行なわれ、全国から二百人が参列した。

第五福竜丸展示館には、早朝より、久保山愛吉氏碑に献花する青年たちの姿が見られ、東京原水協主催の「ちかひの集い」には、当日来館した和光中学の生徒たちなど約六十人参加した。また、江東文化センターで第五回久保山忌句会、豊島区民センターでは、平和と軍縮をめざす東京青年の会よびかけの九・二三平和のつどいなど、さまざまな記念の催しが行なわれた。

編集後記

▼九月三日、元第五福竜丸乗組員でつくる「福竜会」に初めて同席させていただいた。前日、見崎さんから電話で「特別何も話さないよ」と言われていた。その言葉どおり、集まった乗組員の人たちは、改まった挨拶をすることもなく、まるで近所から来たように談笑をしていた。雨が小降りになったのをみはからって、久保山さんのお墓に参り、記念写真を撮った後、市内でコーヒーを飲みながらの雑談。会は想像以上にささやかなものであった。だが、ささやかだからこそ、年一回、遠方から集まる乗組員の気持ちを考えられずにいられた。みんなの元気な姿を見るだけで、励みになる——別れ際に半田さんが語った言葉がいつまでも心に残った(は)。

● 100万人参観者運動を!

85年9月来館者数	4,227名
通算1カ月平均来館者数	5,153名
当月1日平均来館者数	169名
通算来館者数	577,133名